主体になっていないと難しいということがあります。行政って縦割りで、両方の部門に属する課題は、両方が押し付けあってやらないという、そういう癖があります。危機管理と障害福祉と両方に課題があるというのは、非常に危ない話なんですけれども、ぜひともですね、危機管理から、常に「障害福祉、やれよやれよ」と突っついていただいて、障害福祉が主体になってやっていただきたいと思います。

国リハ独自の防災戦略を

それから、さっき言った国リハの話を聞いてもね、ここはやはり、所沢では特別なところだというふうに思いました。こうやって大きな施設で食事も出るという、大きな社会資源ですから。単なる二次避難所的な位置付けよりは、もうちょっと積極的に、つまり常時職員がいる市のいろんな団体があっても、ここまで職員がいてるところはないわけですから。ある程度やっぱりここの職員活用を図るっていうことについて考えられる。ここに土地を借りて運営している以上、災害時にそれぐらいのことをするのは、僕は道理的に当たり前だろうと思うので、もうちょっと特別な仕組みの福祉避難所としての役割を得るんだろうなというふうな気はしましたね。

想定と対応についての具体的な指示を希望

G：障害児を持つ個人です。私は、協定書で「災害時」という定性的な言葉で表現しても内容がよく分からないと思うんです。「家が倒壊して住む場所がないから、どこへ避難しなさい」と、そういうところまで言わないと、われわれには訳分からない。私のところですと、若松小学校へ行きなさいと言われてもね、よく分からない。若松小学校区だって、そういう事態が起こっても、鍵が閉まってたら、行ったって、そんな開きもしなかったらどうなるんですか。具体的な形でね、示してもらわないと、単なる災害時という定性的な表現だけでは、一般的には何も分からない。電気は止まった、水道は止まった、避難所へ行ったって同じだろうと思うんですよ。そしたら、家にいたほうがいいかもしれないんですよ。何もその、わざわざ真っ暗な中ね。もし真っ暗で、あのう、夜だったらね、かえってけがするじゃないですか。われわれみたいな老人だったら行けませんよ、そんなとこ。だから、そのへんね、はっきり具体的な形で避難所へ行けとか、家にいたほうがいいかもしれないとか、どうしなさいとかと言ってほしい。所沢の場合は、水が出ることはないと思うんです。地下の水道管が入っているわけでしょ。所沢には水道管の太いのが入っているわけです。だから、洪水は起こらないと思うんですね。だから、どういうときには、どうしたら、どうなるかについて、具体性を持って話をしてほしいと思います。

八幡：大規模災害と言われるのは、震度６強以上のあたりですね。家の中は散乱する状態ですから、わざわざ定義しなくても分かると思います。災害と思わない程度だったら、大規模災害とは言わないです。「水害はない」とおっしゃいましたが、今、かつてない、大雨がありますからね。何が起きても不思議じゃないので、ご注意はされたほうがいい。

自立支援協議会が障害者の防災中核になる

では、一番端っこの方。

子ども支援課 H：お世話になっています。所沢市役所の子ども支援課の H と言います。八幡先生、お話聞かせていただきましてありがとうございました。お話の中にも出て来ましたが、平時からのコミュニケーション、ネットワークづくりが大事だということでした。これは障害のほうにかかわらず、非常に大事なことだというふうに、私ども思っています。お話の中でも幾つか事例ご紹介いただきましたけれども、先生たちの調査の中でもネットワークづくりでも結構ですし、ボランティアに行かれた中で、「あ、こんなのあったらいいじゃないか」というような連携だったり、ネットワークづくりでそういうのがあったらお教えいただけますでしょうか。

八幡：まず、自立支援協議会を軸に障害者団体がきちんとまとまっているということ。もう一つが、どこへ行っても、肝心の障害者団体が行政要求型にまだなっている。提案型になっていない。つまり、「自分たちは何ができるか」を提案できていない。「行政が、あれができてない、これができてない」というのが、まだちょっと多すぎるような気がします。やっぱりさっきまで、災害というのはもう起こってしまえば、行政は、ほんと機能していないわけです。事前に、行政が準備できることはあるけれども、やっぱり自ら動かなければいけない。例えば、「自分の家が無事であっても、自分の仲間はどうなんだろう」という形で、僕は障害者支援センターをつくってほしいと思っています。「自分が無事だったからよかった」ではなくて、「誰か仲間で被災してる人がいてるんじゃないか、家がつぶれた人があるんじゃないか」というようなことが、普段からやっておくことで、いろいろ考えられる。

全国ネットの支援

もう一つが、障害者団体って結構全国ネットを持っています。例えば、新潟でもですね、あるデイサービスが機能停止したんです。職員が二人とも動けなくなっちゃったんですが、そこが持っていた輸送サービスのネットワークの人たちが、県内からやってきて、職員に、「口でだけ指示してくれたら、自分たち、デイサービス運営するよ」っていうことで、そのデイサービスを運営した事例があるんですね。

人事は民間が調達するのが強い

ですから、人手の問題は、僕はやっぱり行政が調達するよりは、やっぱり民が持っている力が結構強いんじゃないかと思う。今はもうネット会議までするような時代ですからね。障害者団体は、たいてい縦割りで、市何とか協会、県何とか協会、全国何とかね。全国ネットされている団体がもう幾つもあるわけで、そういうところは、身銭切ってでもやってくれるんです。国とか県の応援体制でやるとね、金の話でもめるんですね。派遣費用はどっちが出すんだという形で。国がやるということの限界っていうか。やらなくていいということではないけれども。国は国でやってくれたほうがいいけれども。むしろ自分たちが持っているネットワークが実際に動きます。輸送サービスも、要るところはないかなといったら、全国輸送サービスネット言うたら、1 台、2 台、ぱっぱっぱっと来ますからね。そろわなかったら、トヨタに言ったら、何か入りそうだとかいろんな情報持ってて、物品も物資も何も民間のほうが集まりやすいわけですよ。足らないお金にしてもね、例えば、ゆめ風に言う。自分たちが持っている民間ネットワークを災害時に生かさないっていうのは、非常にもったいない話です。だから、障害者団体自身が、災害時に各市町

村でネットを組んで、情報を共有してくれというふうなことを思っています。

町づくりに障害者が参加する

もう一つが、町づくりに障害者がほんとに参加しているのかと。国にはいっぱいものを言うけれども、町に目を向けてない。本当に、町の中で隣近所と付き合う息吹がないと、ちょっと言い過ぎかもしれませんけれども、福祉の専門家だけのサービスを受けて、市場に行ったりはできるけれども、それは収容施設と何ら変わりないんじゃないかと。「町で生きるというのは責任も含めてですね、いろんなかかわりを持つっていうようなことが、町で生きることじゃないか」っていうようなことを言った障害者がいてて、僕はそれを思ってて。どうしても関係者や団体同士ばっかりがつながりすぎてて、町内会っていうのがない。国リハや国リハが、みんなで拠点的にやらなあかんけれども、それでも障害者が隣近所のおっちゃんとかかわりを持てて生きていけるようなそういうことは目指したいなと。

防災を通じた町づくり

逆に言うと僕が言いたいのは、防災をしたいんじゃないんです。防災を通じて、赤ちゃんからお年寄りまでみんなかかわり合い、こんなにいいネットワークないじゃないかと。障害者が町づくりに参画できずに、こんないいネタをほっておくっていう手はないというふうに思っておりまして。ぜひともこういうことをやりながらですね、いろんな町の障害者啓発っていうのをやっていけたらいいなというふうなことを思っております。長い間、話して申し訳ないですけど。

所沢市障害者団体協議会より

A：今、お話しいただきまして、大変に勉強になりました。所沢市には障害者団体協議会がございまして、私が会長を務めています。

八幡：（笑）

A：二重団体なんですけれども、所沢市の身体障害の主な障害者団体をみんな網羅して。

八幡：ああ、はいはい。

A：やっぱり障害者はね、災害に弱いんです。

八幡：はいはいはい。

A：ですから、いろいろとね、文句を言ったり、要求を出したり、どうしてもそちらにね、偏りがちな点があると思いますけれども。私どもやはり一番重大な問題は、弱いだけにね、この災害の問題だということで、そういう立場では行政にも申し上げています。しかし、東日本大震災の経験から踏まえてもね、他力本願は駄目。障害者は障害者であってもですね、自分たちでできることはね、やっぱりやらなきゃいけないということを、今、言っております。

八幡：はいはい。

A：新しく「防災ガイド」をね、所沢市が作って配っていただいておりましたけれども、今度は全戸配布でもっと詳しいものを、作ってくださっています。これは大変ね、役立っております。私ども障害者団体は、それ以前の余ったものはちょうだいして、会員に全部送りました。これは大変喜ばれました。それ以上のものを、今度は市が作ってくださいました。先ほどから申し上げ

ておりますのは、障害者団体も、今、伺いましたようにね、自分たち自体でもやはりできることはね……

八幡：はいはい。

A：やろうと。同時にね、やはりそれに基づいて、先ほどから申し上げておりますように、リハビリさんとか、行政。障害者の意見も含めてね、やはりあの、何らかの今日のようなやはり活発な機会は、非常に大変参考になると思いますので、続けていただけるようにお願いしたいと思います。

それから、協定等は、見直すべきものはなるべく早急にですね、見直しをやっていただきたいし、それから、また、逆に障害者団体に対して、今、先生がおっしゃられたようにですね、こういうことも障害者はできることもあるかもしれない。というようなことは、報告していただければ、私どもも自分自身の問題として、それに向かってね。実践するように努めていきたいと思います。

八幡：はい。

A：障害者団体の中にも元気な者もいれば、全然もう動けない人もいる。さまざまですから。

八幡：なるほどね。

A：それぞれね、やはりそれぞれの立場を見て、そういう大災害に応じて、どのように行くか、安全安心のほうでいくか。頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

八幡：いや、なんせ東日本大震災でも当事者団体、めちゃめちゃ頑張っていますからね。いろんな団体がやっているんで、どうも本当に、防災っていう形でなんか守られるっていうことではなくて、当事者を中心にした防災を考えてほしいっていうような、そういうことをやっぱりどんどん変えていきたいなと思います。

ゆめ風基金について

それと最後にちょっと宣伝させてください。ゆめ風基金というところはね、あのう、まあ、ほんとに 100 パーセント給付金で動いているところ。今あのう、県外ボランティアを、現地に雇い上げの人たちに切り替えて、とりわけ当事者のエンパワメントを中心にやっていくとなると、1 年、2 年で済む話でなくて、何年も掛かる話です。元へ戻るっていうのは、もう、東北沿岸部は全然話にならないので、もっといい物質がなきゃあかんので、頑張っていきたいと思っているんですが、いかんせん、お金がめちゃくちゃ要る。ですから、息長くて結構ですので、またご支援いただけたらと思います。今日は「障害者市民防災提言」という本や宣伝の文章を持ってきているので、それをご覧になって、もしくは、ホームページをご覧になってご協力いただけるところはご協力いただければ非常に有り難いなということで、最後に宣伝させていただいて。こんなもんで終わりですね。はい。（拍手）

北村：ありがとうございました。今日は大変いいお話を伺いまして、長時間ありがとうございました。提言書は、今、後ろにサンプルがございますので、お手に取ってご確認いただいて、ぜひご注文いただければと思います。それでは、次回いつになるか決めてないんですけれども、皆さまのほうから「こんなのがしたい」というご要望ありましたら参考にさせていただきたいと思い

ます。また、ご案内させていただきますので、よろしくお願いいたします。今日はどうもありがとうございました。

（拍手）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

講演後の座談会

参加者：

八幡隆司（ゆめ風基金）

福田暁子（武蔵野市・盲ろう）

北村弥生、高橋競（国リハ研）

通訳・介助者

主体性を持った他力本願

北村：福田さんも八幡さんに質問とか意見とか、あったんじゃないですか？　講演会の後、時間が足りなかったけど。

福田：「主体性を持った他力本願とは」って言いたかったんだけど。「他力本願は無理なんです」って言ってたけど、「他力本願でこそ、助かるんです」って言いたかった。どれだけ他力本願ができるかが、自助だと思うんです。重度障害者は。私はね、そこを言いたかったんだけど、言えずじまいで。

障害者が災害本部長をする

八幡：阪神のときに、重度障害者で、自らも被災者で、地域の炊き出しをやった人がいるんですよ。「こんなときに障害者が恩を売っとかなくちゃ」って（笑）。

北村：避難所でやったんですか。自分の事業所で。

八幡：自分の家がつぶれた周りで。でも、命令だけが飛んでくるわけですね。「炊き出ししたいから」「人を何人よこせ、食材何人、食器何人分」とか言うて、全部口で指示してこう言ってるんですよ。

北村：動き回ったのは八幡さんだったんですね。

八幡：僕らの仲間なんですけども。動いたのは僕らだけども、炊き出しをやったのは彼です。だから、変に避難所で介助を受けるよりは。障害者拠点で管理職、災害本部長をしてもらった方がいい。

外出中のサインを扉の内側に貼る

福田：うん、そう思います。武蔵野市では、どこの地点で洪水が起こりやすいか、どういう災害を一番想定しないといけないかっていうハザードマップができています。今、一生懸命、古い下水道管を交換してるんです。大雨で下水管が破裂してしまって、沈下するのが一番可能性が高いらしくて。そうすると、逃げるルートもなくなっちゃう私の場合は、１階に下りていいかの判断をどうやってするかですよね。

一つだけ私が忘れてたのに、さっき、気づいて、ちょっと笑っちゃったんですけど。私が逃げ

たっていうのを知らせる方法をつくってなかったんですよ。自助の中に。私は自分が助かるっていう、助かるっていうか、他力本願的って言いながら、人が来てくれるのに、自分から、「私は逃げました」っていうのを教えるリボンとかって言ってたけど。今、ここで、地震が起きたら私は所沢にいるけれども、支援者とかは私の家に来ると思うんですね、もう既に。隣のおじさんとか来ると思う。管理人とかもすぐ来て、キーボックスの制度にしているので、キーボックスを知っている人の間は連絡網で全部が結び付いているので、開けて私の家の中に入れるんです。入って構わないっていう許可だけ出しているんです。それで、開けて入って、私がいないっていうの分かるまでその人逃げられないわけでしょ。部屋が倒壊して、私の部屋の中で支援者が死んでたら、悲しいなあと思って。

一同：(笑)

福田：分かります？　私を探している部屋の中で、ごちゃごちゃした部屋の中で、私を探している間に、こう、冷蔵庫がバタンって倒れて、その人、死んだとかなったら。あ、申し訳ないなあとは思ったから。で、そのとき思い出したのは、うちの武蔵野市で聴覚障害者の人は逃げるときに、「私は逃げました」っていうゼッケンを家に貼って、逃げるっていう決まりを昔つくったんです。その決まりに沿って、逃げたらしいんですけど。ゼッケンだから、「私は逃げました」っていう意味が分からなくて、自分の服に張り付けて逃げちゃった人がいて。

北村：それ、南三陸でも聞きました。

八幡：意味ないやん。

福田：でも、ほら、ろう者は、昔の盲ろう者って、文字を見ても分からないから。ゼッケンだからこう、つけるものだと思って、付けて逃げたらしい。避難所にやってきた。「逃げました」って書いてあるのを付けてきたっていうのを通訳者から聞いて。私もやりかねんなあと思って。

北村：福田さん、外出中のサインとか決めます？

福田：決めなくちゃなあと思ったけど、ただ外出、留守であるっていうのを示すことのリスクもあるので。だから、私の家に侵入する経路はもう、玄関ドアしかないので、玄関ドアにマグネットをはれるから、会社で働いていたときは、居所を示していたようにそこに「避難した」「外出と」か、「家にいます」とかっていうのをつくっちゃおうかなあと思った。ドア開いて、開けて出ていくときに、外出にマグネットを移せばいいだけで、そのときに、緊急のときには「避難しましたと」いうところに移しておけばいいかなあっていうのと、外から見ても分かるように、避難のときだけリボンをつくってもいいかなあ。

福田：ドアの内側に。キーボックスで開けたときに、私が逃げたかどうか分かるように。外階段から、外から見て、オレンジのひもがあったら、災害が起きたときは、あ、逃げたっていうのが分かるようにしておいたほうがいいかな。ただ、洪水とかのときは、逆におぼれるから、下ろさないほうが賢明でしょ。津波も想定外だけど、想定しておいたほうがいいでしょ。

北村：旅行に行った先とかね。

福田：私も毎日想定外だから。なくはないと思いますよ。「津波が来たら、どうする？」って、この前、ヘルパーに聞いたら、ヘルパー、結構まじめに考えてて、「うーん。なんか、お風呂で

使っているシャワーチェアをビート板にします」とかいって。
八幡：(笑)
福田：なるほどーって。頭いいじゃないかとか言って。
北村：泳いで逃げるの？　ぷかぷかって感じで。
福田：エアマットは浮くから大丈夫ですよねって。
北村：南三陸でも、エアマット浮いたって言ってましたね。
福田：そうそう。それでいいんじゃないですかって言おうと思って。その人は、災害時の支援、指定ヘルパーなんですよね。私の中では。
災害時の避難先
歩いて、自転車でもなく、徒歩で20分以内に、駆け付けられる人を確保しておくのって重要じゃないですか。自助の中で、困るものって人なので。特殊なこう、日ごろから慣れた特殊な介護、胃瘻の扱いだとか、通訳者ですよね。のんきにね、「もえてる」とか手に書かれてもね。
一同：(笑)
福田：困るわけで（笑)。
北村：福田さんは、病院に行くんだっけ。
福田：自分の体に異常がなければ、難病者の非常用電源のある福祉施設に直接行きます。　要援護避難制度の支援者が、一次避難所に報告だけいくことにしてます。逃げる必要がない場合は逃げないっていう、原則です。
備蓄
北村：逃げない時に物資が来る手はずは整いそうですか。
福田：きれいな水だけは自分で買って置いてあって、あと、もちろん必要な薬が 2 週間分、入りにくい薬が 3 週間分。リストは長いんですけど、食糧に関しては、一般的な食糧もありますけど、経口栄養でも全然いけるので、あの、胃瘻から入れられるので。私、いつでも帰宅困難者になれるので。
一同：(笑)
福田：OL で働いて、通勤してて、ついでに自宅困難経験が 3 回あるので、車いすから、ちゃんと呼吸器も動かせるようにしてあるし、3 日間はどうにか生き延びられるはず。このまま被災しても？
北村：すごいなあ。
福田：なので、後ろのかばんが大きいんです。
八幡：自助ができてる。
北村：割とすぐに、協定結んでくださいとか言われるんですよね。でも、内容のない協定は結んでもあまり意味ないんだけど、なかなかそこがご理解いただけないですね。今日、八幡さんから随分言っていただたので、少しは、ご理解いただけているといいんですが。
北村：言う機会は、皆さん、それぞれお持ちで。それぞれで言ってらっしゃるんだと思うんですけど。

八幡：ただ、国リハの職員としてね、周りがあたふたしているときに、自分たちは何をすべきかということについては、考えておかないと。
北村：そうなんです。
八幡：周りが災害やっているのに、国リハだけ研究やってるって、変な話になる。
北村：研究は災害が発生してしまったら、あまり、することはありません。事前準備と、みんなが忘れかけたころの追跡が、研究として役割を発揮できることかと思います。東日本大震災では、発達障害児者の支援に関する情報提供には、これまでの知見を少し、お役に立てたと思います。初めは、誰も、どうしていいかわかりませんでしたので、どこから情報をとるか、すでにある有効な知見は何かをお示ししました。2週間したら、担当職員で回せるようになりました。

国リハには、支援員や病院職員がいますので、彼らは、利用者の対応と地域への対応に力を発揮すると思います。ただ、私を含めて、誰がどんな役割を担うかは、まだ、準備ができていません。

北村：国リハにテントを持ってくるという発達障害の方からのご希望もうかがっているのですが、屋外でテント暮らしは、夏と冬はきついって聞きました。季節のいいときはいいんだけど。また、テントで暮らすたちにトイレとゴミ処理と物資が行くように考えておかないといけない。テントを建てるなら、テント村での自治体制も考えないといけないと思います。
八幡：その前に、国リハは、耐震建築に変えないと。
北村：病院と本館は耐震基準を満たすように建て直しました。研究所は、耐震工事の必要はないという検査結果だったそうです。自立支援局も補強工事の予定が入っています。

企業の社会貢献を活用する

八幡：この東日本大震災では、多くの企業が、企業として何が貢献できるかということを考えてますね。物を出したり、金出したりしていますよね。企業利益的にはやらなくてもいいことでも。僕たちが今支援を受けているのは、タケダのアリナミン。一粒につき1円、震災単価を集めていて、それが何年か分で7億か8億あるということで。そのうちおよそ5,000万がうちに来ているんです。社会的責任と言うか、社会貢献という意味で、災害時にどうするかっていうのは、国リハぐらいの規模になると、ちょっと別途考えなかんのちゃうかなと思うんですね。

障害者団体の力

八幡：障害者団体も力はあると思って。変に避難所で物資もらう以上に、障害者団体を通じてもらうほうがはるかにいい物資がもらえるだろうと思っててね。阪神のときは、あるデイサービスでやっていたところが、みんなで集まって、「物資欲しい」ゆうたら、物資で埋もれちゃって寝るところがなかったって。・・(中略)・・・それから、今はネットに流すときは、必ず事前連絡を取ってから送ってくださいと、言ってるんです。それでも、あの、事前連絡とりあえず、送っている人、は、何人かいます。あれやこれやって、あのう、障害者が中心にするべきことはやっておいたほうがいいんじゃないかと思います。
北村：そうなんです。

自立支援協議会の当事者部会

福田：武蔵野市も自立支援協議会ができて、東京都で唯一当事者部会っていう専門部会をつくったんですけど。私が副部長やっているぐらいだから、3年掛かってやっと精神障害と発達障害の二つが声を自分で上げられるようになって。その分、知的障害の人たちがついて行けないのをカバーするために別部会を設けることにして。はじめは一緒にしてたんだけど、知的障害の人たちが、こう、退屈になって、動く知的障害、大変なんですよね。・・・(中略)・・・もう我慢できないから、それは別部会、っていうか、別の分科会として同じ内容のことをもっと分かりやすく当事者で話し合ってもらうということにしたので、今年度は何をテーマにするかは、来週の月曜日に初めての、今年度初めて始まるので、当事者部会だから、もう、いや、3年目になると、えー、確か、だいたい 3 障害プラス発達と難病が加わっているので、言いたい放題言うんで。まとまらなくて。

一同：(笑)

福田：はじめのね、2年間はすっごい苦労したんですよね。やっぱり身体障害がこう、見えるのと、サービスが多いので、文句も言うけど、精神障害は、ずっと押し黙ってて。部会長が精神障害者になって、ようやく、雑多な訳分からない集団で、武蔵野市のトイレチェックとかみんなでやったりとかして。提言書にまとめて出すっていう感じで、親会っていうか、いろんな専門部会があるんですけど、その、それぞれの専門部会に、当事者部会から派遣をするという形で、当事者の意見を持っていってもらって、持って帰ってきてもらうという仕事をしてもらってて。で、具合悪くなるので、障害者だいたい、精神障害者の人は寝込むときがあったりとかするので、ちょっとバトンタッチするんですけど。こうね、なかなかね、まとめるのも大変だけど、楽しくなってきました。はじめは、何だかよく分からないっていうか・・・(中略)・・・。みんな、口々に言うのは、すごい視野が広がって、ほかのこと、自分の障害以外のことも勉強できる機会があって、地域にほかの障害のこと、障害者のことを知ることで、同じところや違うところとか、発言できる場所として楽しいから参加しているという人が増えてきたのは、進行側としてもね、やっぱりうれしいかなあって。私は言うだけ言うんで。

八幡：あのう、障害者連合会とかいうのはね、変に歴史があったりとか、どことつながっていないとかいうのがあるので、自立支援協会をやっぱり窓口にするほうが、あの、いいのはいいんですよね。問題なのは、新しい団体も古い団体もすべてね、自立支援協議会に加盟して、武蔵野市は部会が幾つかあるそうですけれども、やっぱりそこらへんの部会の積み方なんですよね。

北村：それって、誰がどうするか決めるんですか。

八幡：行政が事務局になっているところは面白くないですね。自立支援協議会っていうのは、会員そのものがもっと動かなくちゃいけなくて、大阪市城東区の場合は、自立支援協議会城東というような、協会のちょっと1文字ぐらい変えてNPO団体をつくったんです。というのは、自立支援協議会そのものは行政組織なので。大きなことはできない。お金ももらえないから。だから、NPO組織にして、どっかから補助金取ってなんかいろいろやっていこうとかいうことです。

福田：東京都の自立支援、多摩地区の自立支援協議会交流会っていうのがあります。政がやっているところと民間の障害者団体の中に事務局置いているところと、社協に事務局を置いていると

ころ、だいぶカラーが違う。あと、置き方によって、こう、専門部会をどのような名前にするかなど自由度が高い。東京都の中での自立支援協議会の位置付け自体もちょっと、まだふらふらしているところもあって。その交流会に通訳派遣の依頼を、東京都に当然出したら、ちょっともめたらしいですけど、でも、東京都の公的派遣で出してもらえたので、「ほら、見ろ」みたいな感じ（笑）。

一同：（笑）

福田：当事者として派遣したのは武蔵野市ぐらいで。全部で 5 人ぐらいの当事者を派遣した。セミナーのあとに相談支援部会だとか、権利擁護とかって分かれてやるんですね。そこに当事者が入ってきたのは、武蔵野市と、あと、東大和とか、よその地域から自主的に障害者がそれに参加している場合のみ入ってた人。武蔵野市のいいところは、当事者部会だけは障害者団体自体が武蔵野市少ないっていうのもあるので、自由に参加していいっていうことになって、障害者手帳の有無は問わないと。

八幡：え、え、え、えー（笑）。

福田：自分が障害を持っていると感じる、生きづらさを感じると思う人っていう。・・・(中略)・・・発達障害、高次脳機能障害の人たちを入れたくて、一応障害者手帳の必要性とかそういうチェックはもうすべて排除して、今、高次脳機能障害の人も、子ども付きで来ます。子どもが連れてくるので、お父さん、お母さんを（笑）。

北村：協定も、武蔵野市は、「人は市役所が派遣します」とか書きこんである施設もあります。だけど、どうやって派遣するのかっていうのは、ちょっと謎なんです。別に市役所は、赤十字とかボランティア団体と協定結んでいるので、そういうところから調整するのかもしれません。ある福祉施設は、「福祉施設の職員がやる」としっかり書き込んであるので、そうじゃないところは、やっぱり市が派遣するつもりなんだと思う。

福田：武蔵野市は行政の中に、障害福祉課の中に自立支援協議会を置いているので、市役所の職員も同じテーブルで話すんですよ。ただし、当事者部会は、自由に当事者の意見を言いたいので、市役所職員入れない。やり玉にしちゃうでしょ、どうしても。そういうやり方じゃなくて、武蔵野市は、障害をリソースとして提供したいから、障害者っていう生きづらさをリソースとして、地域社会の変革に提供したいっていう、地域福祉課の理念に沿ってます。代表の部長と私の副部長までは、拡大協議会というのがあって、全部の部会が集まっていろんなことを話し合う部会で報告して、それぞれのことを報告して、そこには私のケースワーカーもいたりして、やりづらいなあとは思うんですけど。でも、市の障害者計画を見直したときに、自分たちが感じたこととかを、ダーッて書いて、意見を言えるっていうのは、予算も付くので。ほんとは、付く予算ないんですけど、武蔵野市の場合は、特別になんか、年度に、申請すれば予算が付くっていうので、講演会を開いたり、虐待防止法の前に、「虐待とは」っていう防止法案についてのセミナー開いたりとかできていたので、それはよかったかなあって。

武蔵野市の自立支援協議会の部会

八幡：あの、幾つ部会があるんですか。どんな部会がっていうか。

福田：五つかな。
八幡：そんなにもあるの。
福田：「相談支援部会」というのがまずあって、これはどこにでもある。これは、当事者派遣に、結構縛りが掛かってます。例えば、ケース事例を出しちゃうので、そうすると、当事者の参加がまずいっていうか、ご近所の当事者って、意外とあのう、お友達のことだったりするので、そういうときは、「参加はしないでください」って言われているので、そこは参加できないんですけど、「くらす部会」、「はたらく部会」、「権利擁護部会」、「当事者部会」。あと、もう一個何かあって……。教育はないな。
北村：子ども部会？
福田：子どもはない。あともう一個何かあった気がするけど、五つだから合っていると思います。
八幡：あの、くらす部会って何ですか。
福田：くらす部会が、三つに分かれて。っていうのは、昨年度の例です。昨年度だけ三つに分かれたんです。で、グループごとに、医療班と社会促進班と、社会参加促進と。
八幡：どんだけ会員いてるんです？
福田：くらす部会だけで、22～23名います。
八幡：ええー。
福田：だから、三つに分けないと。
福田：で、成果物を出さないといけなかったので、私は社会参加促進委員のグループに入ってて、当事者部会から派遣されてて、それで、要支援のガイドブックっていうのをつくったんですけど。
八幡：まず自立支援協議会そのものが、人数がめちゃちゃ多い。
福田：でも、人口は少ないんですよ。13万しかいないんで。
八幡：結構いろんな団体、いろんな個人が参加できてるんだ。
北村：武蔵野市、お金持ちなんですよね。
福田：あの、お金持ちなので、リッチなので、私そこに住んだっていうのあります。

大阪市城東区の自立支援協議会

八幡：（笑）城東区もですね、自立支援協議会に、有限会社のヘルパー派遣事業所でも、誰でも入れます。普通やっぱりその、民間会社なんか自立支援協会なかなか入れなかったりするんですよね。個人参加もあります。営利会社も個人参加も全部入ります。

気軽に担当の人に、「今度行っていいですか」いうと、「ああ、どうぞ来てえ」という感じで（笑）。だから、まずは、オープンにすべきなんですね。人数がね、めちゃめちゃ多すぎから、さっき言った、部会つくったらいいだけの話で、ね。

武蔵野市の自立支援協議会2

福田：うん。分科会をつくって。またそれと別に、知的障害の親のための講習会っていうか、あのう、説明会みたいなのを別にしたんですよね。っていうのは、デイから帰ってくる子どもを迎えに行っている時間に、私たち働いている障害者が参加できないっていうのがあるので。部会はいつも夜やるので、月一、夜なので、例会が。そうすると、それに参加できない障害者が必ずい

るので。
八幡：部会、夜にやっているところ自体がもう、自立支援協議会としては異例ですね。市役所職員もだから、8時とか9時とかまで拘束されるんです。もちろん自立支援協議会のメンバーなので、メンバー一覧とか出て来るんですけど。

武蔵野市の福祉資源

福田：武蔵野東学園がもありますから、学校の近くに住みたいっていう人たちが多くて。
児童デイも結構、児童の移動支援を、お迎えのデイケアまで、結構子どもの意味ではそういう大きい団体が頑張ってやっているので、そのままショートまで続けてできたりとかもするので、いいかなあっていう。
北村：武蔵野東学園、武蔵野日赤病院、武蔵野日赤短大とかありますよね。
福田：市内の大きい病院が日赤しかないので、そこが中核の医療地点になるんです。あとは、高齢者の居場所として、テンミリオンハウスというのがあちこちにあります。そこは別に、高齢者じゃなくても行ってよくて、地元の引っ越しちゃったおうちを自由に集う場所として、前の市長が今に返り咲く前かな、確か。忘れたけど。なんか一つ、1,000万円の予算で好きなことをしていいっていうのを、地域に投げたんです。振りまいて。親の家として始まったんですけど、認知症になった親の介護とかで、親を一時的に預けられる、デイってほどじゃないけど、一緒に庭いじりをしたり、遊んだりするところがあって。ま、子どもが、ちょっとお迎えのときとかに。一時的にお兄ちゃんだけ置いていったりとかしたり、おばあちゃんとお兄ちゃん置いていったりとか、ヘルパーさん、犬だけ置いてきたって。
一同：(笑)
福田：今日、だんながいないから、犬を預けてきたって感じ。そんなのにテンミリオンハウス使っていいんです。町内会がないっていうのもありますね。
北村：でも、市民コミュニティーがすごい頑張って、地域ごとにコミュニティーセンターがあって、そこで何でもやるっていう感じ。上から下りてくるんじゃなくて、下から言っていって、予算を取るっていう、今日、言ってらしたようなパターンの活動をしている。
福田：コミュニティーセンターにろう者が集まるので、コミュニティーセンターでなんか情報提供をろう者にしたいときとかは、そこでやるみたいですけど。だから、そういう意味では面白い。

支援者の育成

八幡：人材っていうときに、ま、本人でどんどんやる人もいるけれども、いい支援者をつかむっていう……。
福田：うん。支援者は、ヘルパーも同じですけど、うーん、なんかいい表現が見つからないけど、やっぱり自分に合わせてカスタマイズしていくもんだと思うんですよね。だから、その力をこう、身に付けるのが自立の中で、結局他力本願でじゃないと生きていけないんで、どういうふうに他力本願できるか。ヘルパーなんて、手話なんて全く知らないで入ってくる子を育てるわけですよね、私の場合は。もう指文字の、あ、い、って、それから、きゃりーぱみゅぱみゅやってみろとか（笑)、きゃりーぱみゅぱみゅ30回とか。

一同：(笑)
福田：ちゃにーぱみゅぱみゅとかいって頑張っているけど。
八幡：それ、いじめじゃないですよね（笑)。
福田：違いますよ。訓練という。コミュニケーションが取れるかどうかって。結構ね、面白いって思ってくれる人は、どんどんこう、支援に回ってくれる。どれだけこう、自分の支援にこう、支援者にできるか。あと、あの、無理やり支援者にしなくてもいいんですよね。あの、合わない人は合わないので、その人たちはほかの人に合うので。自分のこう、住みやすいようにしていくっていうか。だから、ヘルパーでも通訳テレビとかの通訳ができる子がだいたい二人ぐらいは、最近いるので。あとは、触手話ができる人にヘルパーに入ってもらうと、途中で、セミナーとかに参加したくなったら、「ここから変身して」って言って、ヘルパーから通訳介助者に変身をお願いします。で、映画を今度初めて見に行くんですけど。移動は、ヘルパーとしてガイドしていってもらって、通訳介助時間を節約して、映画館に着いたら、通訳介助さんに変身（笑)。JDFのと早瀬健太郎さんがつくった『生命（いのち）のことづけ』、うん。二つ、2 本立てのやつを 2 時間見に行こうって言ってんだけど、どうなるかって、見に行くじゃなくて、聞きに行くでもなく、触りに行くかって。
一同：(笑)
福田：どういうことになるんだろうとかってね。だって、言う……、話すせりふだけじゃなく、状況の説明も入れないといけないから。あのとき言ってなかったのが、あとで出て来たとか、映画にはあるので。
通訳介助者 X：X（注：通訳介助者は通訳しながら場に発信する場合、盲ろう者に話者を確実に伝えるために、最初に、自分の名前を名乗る)。私前に、あのう、『ゆずり葉』の映画を、盲ろう者に映画を見ながら、伝えてたことがあるけど、すっごい大変だった。
福田：だから、「盲ろう者にの通訳介助では、映画、映像とかの説明も大変なんです。当然、通訳介助者は無料ですよね。」って言ったら（笑)。3 人まで無料で入れることになった。当事者は私の 1 枚で、2 人の触手話通訳者が入るという恐ろしいことに。
通訳介助者 X：X。でも、そういうときに、視覚障害者用の音声解説が入っていると楽になります。状況も説明が入るからね。
北村:震災のときのニュースも津波のすごい映像を通訳者が通訳できなかったですね。たまたま、国リハにいた盲ろう者に長時間、通訳介助者がついていたんですけど、ほとんど通訳せずに、「あー」って言ってました（笑)。
福田：でも、やっぱり、盲ろうの通訳介助者は、近くに住んでいるわけじゃないので。やっぱりご近所力だと思うので。市の通訳登録者、そのへんの市民のおばちゃんがメインなので、その人たちにもうどんどん、どんどん入ってもらって。で、市の登録通訳者の、普通の手話通訳者の人に、触手話での伝え方を覚えてもらって、で、それも合わせて派遣で、ま、一人生活が成り立っているっていう感じですね。
八幡：運営本部で、『逃げ遅れる人々』っていう DVD をつくったんですけども、最初、副音声

を入れていなくて。んで、それじゃいかんということで、ゆめ風のほうで付けさせてもらって、今は副音声付きのDVDを販売しているんですけども。

北村：あ、はじめのは付いていないんですか？

八幡：最初のは付いてないです。

北村：はじめ買っちゃったんです（笑）。今のは付いているんですか。

八幡：はい。

北村：じゃ、もう一回買えばいい（笑）。

八幡：（笑）

福田：ちなみに、えーと、当事者部会にも上映権付きで下りてきて、私たちの。で、当事者部会で、既に上映会はやったんですけど。

福田：ただし、市の通訳者で、触手話で状況まで伝えられる人がまだ育ってなくて。

八幡：あの、普通の手話の人では、触手話できないですか。

福田：んー、できなくはないですけど、たぶん慣れが違うっていうのは。

八幡：ああ。

福田：あと、盲ろう者のニーズが分かっていないのと、ろう者のことはよく分かっているんですけど、やっぱり何回も何回も会って伝えていくうちに、この人はこういうことを、これくらいのレベルはこういう人だとか、こういうことに興味があるとか、例えば、一緒に、通訳してもらってても、この人が見たいものを、私が見たいものとは限らないものですから、私のことがよく分かってもらえるためには、たくさんの通訳者に、こう、ダメもとでどんどん通訳をしてもらう。それから、市の派遣が可能なもので、くだらないものでもいいので、結構派遣に出してて、私、それで手話覚えてたんですけど、どんどん。で、市もなんかこう、触手話の通訳の派遣がやたら多いので、かどうか分からないんですけど、通訳者の会からも要請があって、私は何にも動いてないんですけど、何か触手話の講習会とかに予算付けちゃって、なんか市がお金出して。大変な騒ぎになってるんです。

北村：今年？

福田：毎年です、これがまた。

当事者の交渉を支援する

福田：うん。だから、今年の、去年も、昨年度話したのは、やっぱり声が届かない障害者の声を拾うシステムづくりっていうのをしないといけないと、当事者部会で話してて、そこにやっぱり、高次脳機能障害とか、難病で出れない人とか、あと、知的障害の人たち。盲ろうもそうなんですけど。ほとんどの場合、あの、支援者がないと、きっと何かしらフィルターがないと通じない人たち、グループを大きくコミュニケーション障害っていうくくりにして、届けたいかなという、そこまでは話してるというかね。

八幡：ちゃんと寄り添って、一歩下がってサポートしていくというサポーターは知的ではなかなか育ちにくいみたいで。

福田：うーん、まあ、そこまではやっぱり障害種別を越えたっていう、クロスジディスアビリテ

ィーの大きな意味だと思うんですよね。あと、私、便利ですよね。視覚障害もカバーしているし、聴覚障害もカバーしてる。肢体不自由もカバーしてるし。
北村：難病もカバーしてる。

以上

(資料 11－2)

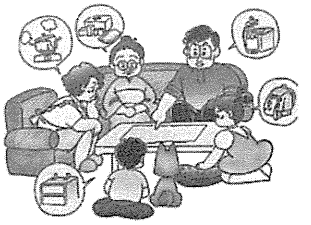
聴覚障害者と支援者の災害時の備え

日時：平成２５年８月８日（木曜日）　１０時から１２時

場所：所沢市旧庁舎３階 310・311 会議室（所沢市宮本町 1-1-2）

対象：聴覚障害者、家族、手話通訳者、要約筆記者、支援者

資料準備の都合がございますので、２日前までに連絡先まで、お名前、ご住所、メールアドレス、お立場（当事者、家族、通訳者、筆記者、その他）をメールまたはファックスでご連絡ください。
全体手話通訳は手配いたします。

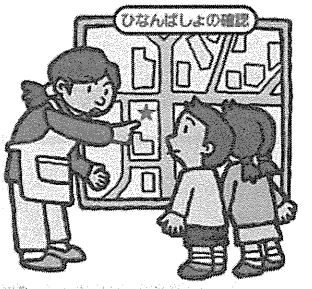


出典 www.city.nabari.lg.jp

講師：宮澤 典子（国リハ学院手話通訳学科）

内容： 厚生労働科学研究「障害者の防災対策とまちづくりに関する研究」（研究代表者：北村弥生）において、災害時における要援護者支援に関して、所沢市内の聴覚障害者および支援者への情報提供と意見交換を行います。

連絡先：北村 弥生（社会適応システム開発室長）
国立障害者リハビリテーションセンター研究所
kitamura-yayoi@rehab.go.jp
FAX: 04-2995-3132
TEL: 04-2995-3100 内線 2530



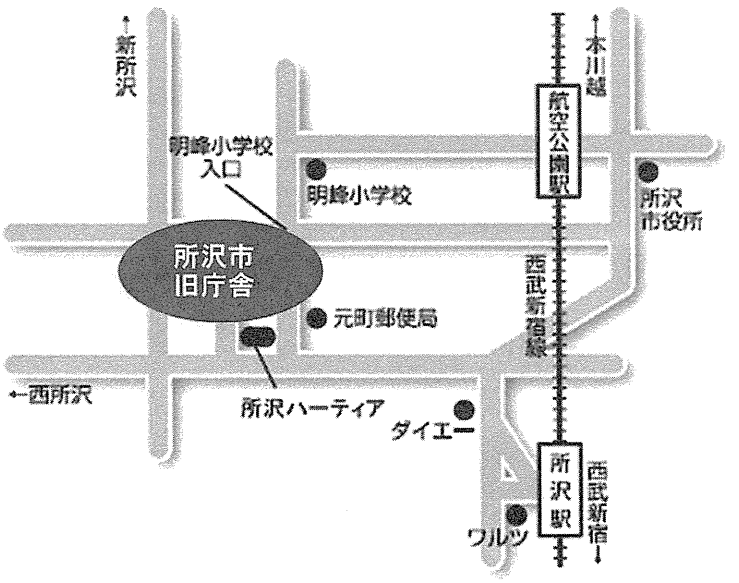
出典 www.city.chiryu.aichi.jp

会場案内図：

交通案内
駅から徒歩の場合
- 所沢駅西口より 徒歩 15 分
- 航空公園駅西口より 徒歩 10 分

公共交通機関利用の場合
- ところバス
  西路線 ところ荘下車　徒歩１分
  南路線 中央公民館下車　徒歩１分

協力：所沢市社会福祉協議会



こんにちは。国立障害者リハビリテーションセンター（国リハ）研究所障害福祉研究部の北村弥生です。本日は、暑い中、ご参加いただき、ありがとうございます。

講演の前に４つ確認させてください。
一つ目は、今日の参加者です。聴覚障害者 11 名、手話通訳者 3 名、要約筆記者 3 名、民生委員 1 名、町内会役員 1 名で、合計 20 名が、事前登録してくださっています。また、本日の案内と会場の準備は所沢市社会福祉協議会様にお世話になりました。

二番目に、本日の情報保障を紹介します。講師の宮澤先生は国リハ学院手話通訳学科の教官ですので、手話は堪能でいらっしゃいますが、講演は発話で行っていただきます。手話通訳者は所沢市の登録手話通訳者ではなく国リハ学院から２名にお願いしました。

今日は、要約筆記を使われる方はありますでしょうか？手を挙げていただけますでしょうか。・・・ありがとうございます。要約筆記は、要約筆記者ではなく、国リハ学院手話通訳学科の卒業生２名にお願いして、パソコンのワープロソフトで入力して、スクリーンに表示します。学科で１－２時間、要約筆記の授業はあったそうですが、実戦経験はありません。原稿を作ってあるところは、原稿を表示し、追加を挿入してもらう予定です。あらかじめ追加予定の場所には＊を、時間によって言わないかもしれないところには＜＞を記入してあります。私は、できるだけ、原稿を読むようにいたします。

パソコン要約筆記では、複数の要約筆記者が IP トークというソフトを使って、補足し合いながら表示するのですが、避難所で地域の人に「要約筆記のようなもの」を，お願いした場合の試しをしたいと考えています。入力のお二人の入力速度は、速い方だと思いますが、「要約」には不慣れですことを、ご容赦ください。

三番目は、記録です。本日の内容はビデオで記録しています。テープ起こしを、発言者にご確認いただき、年度末の報告書に掲載したいと思います。この場限りで、記録に残したくない内容や、修正したい内容は、確認をお願いする時に、削除や修正をしてください。確認いただくために、御発言の時には、お名前をおっしゃってください。また、後日、講演内容は、宮澤先生ご自身に手話で表現していただき、その動画を報告書に添付することも計画しています。

四番目に、進行です。はじめに、１時間ほど、宮澤典子教官から、東日本大震災の経験により得た、災害への対応と備えについてのご講演をいただきます。５分休憩した後、自助（当事者、支援者）・共助（地域）・公助（社協、市役所）として、所沢では何を準備するかについて、お配りしたアンケートに沿って、意見交換をしたいと思います。

宮澤先生のご講演あるいは、災害時の不安に関するご質問は、休憩時間中に質問用紙にご記入になる方はご記入になって休憩が終わるまでにご提出ください。手話で質問されたい方は、午後の進行にあわせてご質問ください。

午後の進行で、手話で質問したい内容が出てこなかった場合は、終了後に前にいらして、手話でご質問ください。

今日の時間中に回答できなかった質問には、報告書（印刷と DVD）で回答させていただきます。

次に、お知らせです。
所沢市では、地域の自主防災組織の一部が、８月３１日に小学校で防災訓練を行います。研究チームでは、そのうち、美原小と荒幡小で、アナウンスを画用紙にマジックで書き、掲示するデモンストレーションをする予定です。実際に、それでよいのかを試す事と、地域の人にも何をしたらいいかを見てもらうことが目的です。まだ、聴覚障害者の参加は両校共に決まっていませんので、ご参加いただけましたら、ありがたいです。９時から１１時半くらいで、４千円程度の謝金をお支払いできます。また、後日、感想を聞かせていただきます。

手話通訳者にも参加を依頼しますが、当事者への情報保障ではなく、当事者から「掲示で不足する情報を補うため」に派遣します。「アナウンスだけでは何が不足するのか」を研究として記録に残すために、手話通訳者に同行してもらう予定です。

では、宮澤先生、よろしくお願いします。

＜スライド１＞

聴覚障害者と支援者の災害時の備え

ー東日本大震災の経験からー

Auguest08,2013

国立障害者リハビリテーションセンター学院

手話通訳学科　宮澤典子

宮澤：今日は、東日本大震災の経験から、防災について考えていくために、皆さんといろいろ意見交換をする前に、東日本大震災の後、被災地でどのようなことを行ってきたのか、少しご報告したいと思います。

なぜ私が被災地の体験を話すかと言いますと、私はこの近く（埼玉県所沢市）にある国リハで、手話通訳学科の教官をしていますが、自宅は宮城県の仙台市にあります。

平日は所沢にいて、週末は宮城に帰るという単身赴任生活です。２年前の震災では、自宅のある宮城県が震源地、一番大きい被害を受けました。自宅に戻って 2 カ月間ぐらい、宮城でずっと聴覚障害者のための支援活動を行いました。幸いなことに、職場が厚生労働省の管轄だったので、厚生労働省から派遣されるという形で、宮城で支援活動を行うことになったのです。そこで、今日はその様子をご紹介して、これから皆さんが何をしておけばいいのかを一緒に考える手ががりにしていただきたいと思います。

震災の被害状況

＜スライド２：被災状況の写真＞

これは３月 11 日に、宮城県の内陸、宮城と岩手と秋田の県境に近いところの様子です。ブロック塀などが全部倒壊している感じです。この栗原市は、今回の地震の最大震度７を記録しました。

＜スライド３：被災状況の写真＞

これは逆に、海沿いの石巻市です。海沿いですが、ここもやはり全て倒壊しています。

＜スライド４：被災状況の写真＞

こちらは仙台市内です。仙台市は海から山まで、宮城県を横断するような形なんですが、ここは海に近い方で、津波で全部ぐちゃぐちゃになっています。水がまだいっぱい残っている状態です。